

かには法然様の教えを得手に修正を加え、
旧仏教や朝廷に迎合して保身を図った人
も多くいました。かくして法然門下に、
いくつかの門流が出来てきました。
法蓮房信空(白川門徒)。成覚房幸西の一念義。
普慧房証空の諸行本願義(西山派)。長
西・道教(九品寺流)。湛空(嵯峨流)。
源智(紫野門徒)。聖光房弁長(鎮西派)
智真の(時宗)などです。

京都に帰ってきた親鸞の急務は、残り
少ない同門の人たちの中心になつて法然
さまの命日法要をお勤めすることです。
京都に帰ってきた親鸞の急務は、残り
少ない同門の人たちの中心になつて法然
さまの命日法要をお勤めすることです。
京都に帰ってきた親鸞の急務は、残り
少ない同門の人たちの中心になつて法然
さまの命日法要をお勤めすることです。

親鸞の生涯

27

帰洛後



そのため親鸞の先輩同輩の多くが京都
を追われたり亡くなつて行きました。な
ど親鸞が京都に帰ったそのころのことで
す。何度か焼き出されてもいます。
しかもその上、朝廷はまた改めて「専
修念佛を禁止する法律」を施行し、厳し
く法然上人一門を弾圧追放しました。丁
度親鸞が京都に帰ったそのころのことです。

京都でのそういう教化生活にくわえて
京都でそのような記載が毎年の
「京都大火」。このようないいと
うに続きます。親鸞もその京都で転
々と住居を変えなければなりませんでし
た。何度か焼き出されてもいます。
しかもその上、朝廷はまた改めて「専
修念佛を禁止する法律」を施行し、厳し
く法然上人一門を弾圧追放しました。丁
度親鸞が京都に帰ったそのころのことです。

葬儀

九月十五日

稻葉

政夫

九十歳

出合

しぬる身を
しなぬ身の
なむみだぶに
してもらい
(浅原才市)

うばい合えばにくしみ
うばい合えばよろこび
うばい合えば不満
わけ合えば感謝
わけ合えば地獄
(相田みつを)

敬老報恩講

勝林寺の伝統行事『敬老報恩講』。
かつては七十歳以上の老人を招待して
村や家に伝わる「おみのり」を聞かせて
ただく集会でした。いまでは「七十歳は青
壯年」。ご門徒の大半が該当者。それでも
やはりご招待申し、ご門徒全員相寄つて、
親睦を深め同行のご縁を慶(よき)び合
いたいと思います。お集まりください。
(別にご案内いたします)

十月 翌相月 のこよみ

一日(木) 本山参詣
二日(金) 朗読アスナロ(録音)

四日(土) 斎藤 保氏宅法事
五日(日) 出石組『連研』(光顕寺)
役員打ち合わせ

八日(水) 舞台準備・敬老締め切り日
十日(金) 故老七回忌
眼科検診

十一日(土) だんじり祭り
田村 勉様七回忌

十二日(日) 但馬障害者運動会
斎藤義明氏宅法事

十三日(月) 山田葉留子様忌明
山田葉留子様忌明

十五日(水) 但馬障害者運動会
斎藤義明氏宅法事

十六日(木) 中嶋彰範氏宅法事
縦代会ブロック研修会

十八日(土) 西宗寺報恩講
十九日(日) 出石福祉まつり

二十三日(木) 検診
二十四日(金) 真覚寺報恩講→二十五日
二十五日(土) 斎藤 順夫氏宅法事
二十六日(日) 平野 孝行氏宅法事
三十日(木) 山田 弘様一周年
稲葉 政夫様忌明
あすなろ(編集)

三十一日(金) 長專寺報恩講→26日

三十二日(土) 稲葉 政夫様忌明
あすなろ(編集)

三十三日(日) 平野 孝行氏宅法事
三十四日(月) 真覚寺報恩講→二十五日

三十五日(火) 斎藤 順夫氏宅法事
三十六日(水) 稲葉 政夫様忌明
あすなろ(編集)

三十七日(木) 中嶋彰範氏宅法事
縦代会ブロック研修会

三十八日(金) 西宗寺報恩講
三十九日(土) 出石福祉まつり

四十日(日) 中嶋彰範氏宅法事
縦代会ブロック研修会

四十一日(月) 斎藤 順夫氏宅法事
四十二日(火) 真覚寺報恩講→43日

四十三日(水) 斎藤 順夫氏宅法事
四十四日(木) 真覚寺報恩講→45日

四十五日(金) 斎藤 順夫氏宅法事
四十六日(土) 真覚寺報恩講→47日

四十七日(日) 斎藤 順夫氏宅法事
四十八日(月) 真覚寺報恩講→49日

四十九日(火) 斎藤 順夫氏宅法事
五十日(水) 真覚寺報恩講→51日

五十一年(木) 斎藤 順夫氏宅法事
五十一年(金) 真覚寺報恩講→53日

五十一年(土) 斎藤 順夫氏宅法事
五十一年(日) 真覚寺報恩講→55日

五十一年(月) 斎藤 順夫氏宅法事
五十一年(火) 真覚寺報恩講→57日

五十一年(水) 斎藤 順夫氏宅法事
五十一年(木) 真覚寺報恩講→59日



ただ聞く

姫路から来られた七十三歳の観光の男性

うちの寺の「ごえんさん（ご院家さん・ご住職さま）」のお説教は、わたしらにも分かるようご親切に説いてくださいますから、その場では成る程と頷き合点できたりがたいます。しかし、それでも、しばらく時間が過ぎると、丁度、植物の纖維だけが舌に残るよう、お話の筋道だけが頭に残っていて、味わいというか感銘というか、そんなものは消えていて、ただ無味乾燥な理屈の筋道だけが、しかも「頭」にだけ残っているのです。真宗の理屈が理解できたと言うだけで、こころ満たされたという感じがしないのはなぜですか。

大学の偉い先生や、血氣さかんな若いご講師さんになればなるほど、お聖教の解説。頷けるけれども、味わいが残らないのはなぜですか。

ところが最近、亀山御坊さんに、節談説教の名士という方がお見えになつて、二日間そのご縁に会いました。お話を要所要所に浪花節のような節が入つて、わたしの胸と感情が揺さぶられます。ときには笑い話や人情ばなしも入つて、わたしたちの生活感情に訴えてのご法話がありました。デモ、しかし、2日過ぎて、酔いがさめ心静かになると、「アレ、なんだんのか」と、かえつたて白々しい気分になってしまいます。

理屈の説明や学問の解説ではおみのりは味わえませんが、反対に、感情・感覚で聞いたり見たりして、どこまで「おみのり」が味わえるのでしょうか。わしらの感情・靈感といふのは、いわばその場限りの、しかも自分勝手な、空しく頼りにもなんにもならないものではありませんか。心で聞いても頭で聞いても、所詮、「私」が聞くことは、その場かぎりの得手勝手な聞きようでしかありません。

手な、空しく頼りにもなんにもならないものではありませんか。心で聞いても頭で聞いても、所詮、「私」が聞くことは、その場かぎりの得手勝手な聞きようでしかありません。

田舎から届く味噌の香りの中に、わたしを育てくれた親の願いを思い出すのでしょうか。田舎のオバアちゃんから届けられたお漬物の味を、若嫁は噛み締めてくれているのでしょうか。

田舎から届く味噌の香りの中に、わたしを育てくれた親の願いを思い出すのでしょうか。田舎のオバアちゃんから届けられたお漬物の味を、若嫁は噛み締めてくれているのでしょうか。

秋のお彼岸です。

如来さまのお慈悲に気づかず、我が身勝手に自惚れた、井の中の蛙、煩惱の世界に生きている私も、時に聞こえてくださる「彼岸」彼の岸からの、親のせつない呼び声ナムアミダブツ。「無量のいのち・無限なひかり」のなかにめざめさせたいとの如来の願いを、みんなで一緒に聞かせていいただかねばなりません。

お彼岸



その集いが「彼岸会」のご法座です
勝林寺では、

九月二十三日 午後2時

「秋の彼岸会」の法座が勤まります。
お掃除でお参りください。

九月三十日 ご遠忌お待ち受け法座（仏婦）
出協議決定した事項

九月五日 敬老報恩講役員打ち合わせ会

十月八日 舞台準備

十月十日 敬老報恩講

十一月二日 仏壯全国大会（神戸）

十一月十五日 おみがき清掃奉仕

十一月二十一・二十二日 報恩講

十一月六日 合同役員会（しののめ）

十一月二十七日 お鏡餅つき

十一月三十一日 除夜会

